

7. 護岸造成機

建設省 九州技術事務所 長谷川明孝

1. まえがき

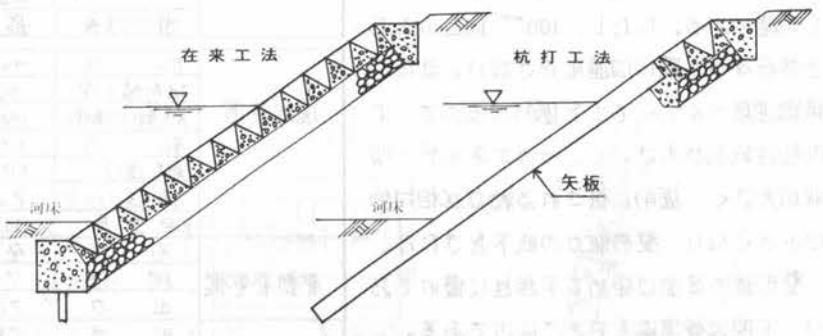
治水路護岸工事は、土木工事のうちでも特に人手依存度の高い工種である。本機は、従来のブロック積みに代え、コンクリート矢板を斜に打込み護岸としての機能を持たせ、施工の省力化、効率化を図るために開発した、大規模斜板打設機である。海岸や小河川では、コンクリート矢板を連続して垂直に打込み護岸とした例は多いが、大河川に適用できる傾斜コンクリート矢板による護岸施工は、例を見ないので紹介するものである。

図-1 工法の比較

2. 在来工法との比較

在来の一般的な治水護

岸工法は、(1)傾斜切り、
(2)水積み、底掘り、(3)基
礎杭打ち、基礎コンクリ
ート打設、(4)ブロック、
又は石積み、(5)埋立し、
傾斜切り撤去といふ手順



を経ているが、護岸造成機は、前記(1)～(5)までの工程を省略し、施工の合理化、省力化を計ることができる。

3. 主要構造

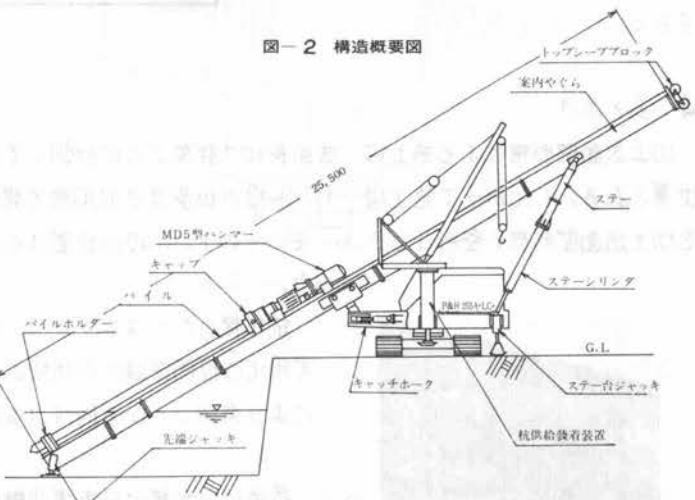
本機は、21t級万能掘削機本体を
ベースマシンとし、これに3点支持
の直角式リーダ、リーダ制御装置、
矢板吊込みフレーム、アウトリガー
などの各装置を蒙装したものである。

矢板の打設は、斜杭打ちに適する
薄膜動式のラム重500kgのブーゼル
パイオルハンマーを採用し、打撃力の不足は、水ゼット(スラッシュ)を併用することによって補っている。時に本機は、一般的の杭打機と異り、連続して精度の高い斜矢板の打設が必要なことから、正確な芯出しが要求される。

このためリーダは、油圧シリンダとリンク機構により、前後方向±200°、射出方向±500°、左右水平方向±200°、擦れ角±10°の微調整が可能な構造になっている。

施工角度は、水平から35°41'(1割5分)まで、矢板裏±10°まで打設可能である。

図-2 構造概要図



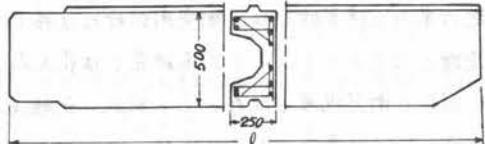
3-1 仕様

作業方式	ディーゼルハンマー(木ゼット併用)による打込み方式	リーダ 調整範囲	(1)前後方向: ±200% (2)射出方向: ±500% (3)左右傾斜角度: ±10° (4)前後振動: 0~65° (5)左右水平方向: 200%
本体	型式: シャベル系振動機 (P&H. 255A-LC) 本体重量: 21.6t 全装備重量: 直打時 37.64t 斜打時 42.20t 最大接地圧: 0.7 kg/cm ²	ディーゼル ハンマー	型式: 三重MD-5改造型 駆動方式: 楔運動 ラム重量: 500kg 一打撃仕事量: 1,350 kg-m
リーダ	型式: 鋼管三足支持 傾動方式: 油圧シリンダ リーダ全長: 斜打時 25.5m 杭打可能傾斜角: 60°(水平より30°)	杭供給装置 射水装置	型式: 油圧作動ジブフレーン 吊り荷重: 2.5t 吐出圧力: 7 kg/cm ² 吐出量: 0.25 m ³ /min

4 作業実績

46. 47年度の試験施工の後、48年度に筑後川工事小森野護岸、49年度に筑後川工事合川護岸の各工事を施工した。施工延長は160mで、実績を、表-1に示す。なお柱状圖や排水工事がから、所要土でN値25程度までの所は、充分施工できることがわかった。本機の施工速度は、矢板(9m)1本当たり所要時間60分、作業時間を

図-3 コンクリート矢板



- (1) 施設: プレス鋼筋コンクリート
(2) 規格: 中50cm×厚さ25cm×長さ8
(3) コンクリート圧縮強度: $J_{28} = 670 \text{ kg/cm}^2$ 以上

表-1 作業実績

施工年 度	杭打込 み本数	江付の 使用回数	施 工 時 間					打撃 回数 (回/回)	搬入量 (t)	工数 (H)	備考
			打込 深度 m	吊出 深度 m	打撃 時間 min	移動 時間 min	その他 時間 min				
49	100	前面	12-07	9-26	18'-44	7'-03	7-56	56-16	1,460	6.64	t.63 倾長 10m
47	20	前面	15-56	13-15	15'-08	6'-51	6-41	57-51	1,255	5.68	4.7 倾長 9m
47	20	側面	16-32	10-36	15'-49	4'-56	4-08	46-00	1,226	5.40	3.75

となる。

(6) おわりに。

45年度より造成機の実用性について調査してきたが、いずれも工事規模が小さく、したがって資料もまだ不充分なものである。しかし今迄の実績から、本機開発の目的である施工の合理化、省力化の他に工期の短縮など有力なメリットのあることが確認されている。反面ハンマーの打撃力及び足廻りの強度不足、蝶、転石等のあらかじめ及び曲率の大きい曲線部の施工不能、矢板價格が高いことなど大きな問題も残っているが、適切な現場条件下であれば充分実用性のあることが確かめられた。今後、さらに問題点の解決を計り、矢板打工法による護岸施工という新工法の確立に努めたい。

